

Abstract

フランスのイラク及びシリア軍事介入
——シャマル作戦の過程追跡

小島 真智子（上智大学 准教授）

本稿では、イラク及びシリアに対するフランスの軍事介入に関し、「シャマル作戦」を中心として過程追跡を行った。分析対象期間は 2014 年の作戦開始から 2019 年までとし、イラク軍事介入の経緯を考察した上で、翌年からのシリア軍事介入に関し、「イスラム国 (IS) 掃討」と「アサド大統領失脚」間の政策上の優先順位はオランダ政権とマクロン政権間でどう変化したか、に留意し考察した。オランダ政権による「アサド大統領でもなく、IS でもなく」のスローガンは、期せずして、マクロン政権下の政策展開に合致する結果となった逆説を、アサド政権の化学兵器使用に因るシリア空爆をめぐる検証した。また、米軍撤退後も仏国がシリアにとどまる理由として、クルド人問題をめぐる対トルコ関係の悪化と、仏国籍のテロ戦闘員を含むとされる人員のリビアへの移動を指摘した。